



教皇様の聲

6

230号

Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticano の転載許可済 ©1999

聖体：教会生活の源であり頂点

皆さん、今日はキリストの御体と御血を祝う荘厳な聖体の祝日です。イタリアはじめ多くの国では、ラテン語の「コルプス・クリスティ」(キリストの体)の方向が通りが良いかもしれませんね。

日曜日ごとに教会共同体は、最後の晩餐で制定されたキリストの贖いのいけにえである聖体の周りに集まります。キリスト信者は信仰の秘義の中心として聖体を敬まってきましたが、およそ七百年前ごろから、特別な祝いの日を定めて、教会生命の源であり頂点である主の御体と御血を存分に礼拝賛美すべきだ、と考えるようになりました。

聖体行列は伝統的で人気のある聖体信心の一形式です。今日の祝日には、世界各地の教会で行なわれます。それは、死んで復活された主キリストが今なお地上の道をお歩きになり、世々を経てキリスト信者の行く手を導いておられることを如実に表わしています。主は人々の信仰と希望と愛をはぐくみ、試練の時は慰め、正義と平和を求める人を支えてくださいます。

神がこんなにも人間の近くにおられることを考えれば、今日の祝日を喜ばずにはおられません。エンマウスで弟子たちになさったように、聖体のイエズスは歴史を旅する巡礼者である私たちのそばに立たれます。

町でも村でも、北でも南でも、伝統的にキリスト教を信奉してきた国々でも、福音を伝えられて間もない国々でも。

どこでもキリストは同じメッセージを伝えます。「互いに愛しあいなさい、私があなたたちを愛したように。」聖体においてキリストはご自身を与え、人々がこの命令を実行に移せるよう、また愛の文明を築くことができるよう、霊的な力となってくださいます。

今日、私は紀元二千年の大祝日までの日々を大いなる聖体行列として心に浮かべています。聖年の六月にローマで開かれる世界聖体大会がそのクライマックスです。全ての信者の皆さん、特に聖なる役務者たち、どうか聖体との霊的なきずなを強め深めてください。御父と御子と聖霊の救いの力はすべて聖体の中にあって、生き生きと働いているのですから。

最初の聖体行列は、ある意味で、マリアがイエズスを身ごもってナザレトを立ち、いとこエリザベトを訪れた時に始まったと言えます。福音書のこの場面を思い巡らしつつ、教会が歩みを速めて現代の人々に近づき、新たな愛で救いの良き知らせを伝えることを願っています。(1998・6・14、聖体の祝日に当たり、お告げの祈りの時のお話)

「連帯と市民権」

【世界学生会議に出席した大学生たちへ】

(「連帯と市民権」をテーマにローマで開かれた世界学生会議のため、各国から集まった学生と教授たちを前に、教皇様はお話しになった。)

● (….) そう、キリストにおいては愛が敵意を圧倒し、憐れみが罪に勝ります。先日の若者たちへのメッセージのテーマとした「御父はあなたを愛しておられる」という言葉が、今も私たちの心に響いています。この明らかな確信が、今回皆さんの選んだテーマ「連帯と市民権」に大きな広がりを与えてくれます。

「市民権」というテーマから考えてみたいと思いま

す。福者ホセマリアの著作に「市民権」という同じ題の文章がありますが、それによると「市民としてのキリスト者の仕事は、文化と経済、仕事と休息、家庭生活と社会生活など、現代生活の全てがキリストの愛と自由によって律せられるよう貢献することである。」(『拓』302番)福者が語っているのはキリストの愛と自由についてですが、これは罪からの自由、恩寵に支えられ、キリストへの愛に発する戦い、自分を神から引き離すもの全て、同じ神の子らである兄弟姉妹から遠ざけるもの全てに対する戦いです。忘れないでくださ

い。社会の将来を左右する重大な戦いが行なわれるのは、この場所でのことです。「第一のもっとも重要な務めが、人間の心の中で遂行されます。人間が自らの未来の建設にどう関わるかは、その人が自己とその運命をどう理解しているかによって決定されます。」（回廊『新しい課題』51番）

● 「市民権」と並ぶもう一つのテーマは「連帯」です。人間の持つ、平和、調和、兄弟愛への大いなる可能性についてぜひ考えていただきたいと思います。祈りや兄弟愛を実行する中で個人的にキリストと出会うことを願う、首尾一貫したキリスト者の生活は世界を変えうるのではないのでしょうか。さらに詳しく言えば、キリスト者の連帯はそれ自体が徳以上のもので、様々な徳、とりわけ正義と慈悲に代表される霊的な心構えであることがはっきりしています。正義は差別を根絶し、個人の尊厳を重んじる条件を保障します。今日キリスト者であるとは、「人間存在のあらゆる局面に及ぶ贖いへの奉仕に生きる」ことを少しずつ自覚していくことを意味します。新たな福音宣教のため信者一人ひとりに課せられた最も基本的な役割は、自分の生活の中で忠実に福音を生かすこと、聖人になることです。まことに、何も惜しまず自らの聖性を求める人は、効果的に善を世に広める手助けができます。

福音の使徒・新たな人間性を築く者になりたいなら、これこそ誰にでも実現可能で具体的な道です。これに

ついては、福者ホセマリア・エスクリバーの教えと勧めに従うのが確かでしょう。そこには聖霊に鼓舞された非常に重要なメッセージが含まれており、教会と全信者が個人と全ての人のために何をなすべきかを悟らせてくれます。

● 親愛なる若者たちよ、今年は大聖年を前にした最後の世界学生会議です。この機会をどうか大切に生かしてください。主の呼びかけに寛大に答えましょう。皆さんもよく御存じのように、キリスト信者の召し出しは個人の心の中に止まるものではなく、愛の限りない次元まで靈魂を広げてくれます。利己主義から愛に向かう改心の道のりの頂点として、神に自己を与えるなら、キリストの救いの使命にあずかる者になれるでしょう。神の子供たちが人類みな兄弟である由来を見出すのは、キリストとのこのような完全な一致においてなのです。

神の御母、私たちの御母であるマリアが、生活を神に向けようと決意する皆さんと皆さんの兄弟姉妹たちを助け、まことの神の子にふさわしい理想を追求させてくださいますように。「人の子が来たのは、仕えられるためではなく仕えるためである」（マテオ20・28）と言われたイエズスのように、イエズスと共に、兄弟に仕えることができますように。

(…)皆さんと皆さんの愛する人々のために祈り、心からの祝福を送ります。
(1999・3・30)

聖母信心はイエズスの意志

聖母マリアと教会 シリーズ 23

1 「婦人よ、これがあなたの子です」という言葉と共にマリアをヨハネに委ねたイエズスは、十字架の上から愛する弟子に向かって「これがあなたの母だ」（ヨハネ19・27）と仰せになりました。この言葉でイエズスはマリアにその母性の高みを示されたのです。救い主の御母であるマリアはまた、贖われた人々の母、御子の神秘体の構成員となる全ての人の母でもあります。沈黙のうちに聖母は、恩寵による母性の最高の高みにまで上げられることに同意しました。その母性は、お告げの時の「はい」という信仰に満ちた答えと共に授かったものです。

イエズスはヨハネが特別の愛情をもってマリアの世話をしてくれるよう望んだだけではありません。マリアを母と考えるよう促し、ヨハネに委ねたのです。

最後の晩餐の時、「イエズスの愛しておられた弟子」は師の命令を聞きました。「私が愛したように、あなたたちが互いに愛しあうこと」（ヨハネ15・12）です。主のみ胸に寄りかかっていたこの弟子は、独自の愛のしるしを受けました。これらのことがあったので、彼はイエズスの言葉の中に、マリアを母として迎え、イエ

ズスが息子として母を愛されたように彼女を愛せよという招きを感じ取ることができたのです。

「ごらん、これがあなたの母だ！」皆さんもこのイエズスの言葉の中に、マリアを母として受け入れ、聖母の愛に本当の子として応えるようにとの招きを見出し、くださることを望みます。

祝された処女は、主を深く愛することを教える

2 愛する弟子へのこの委託を手がかりに、教会共同体のマリア信心の真の意味を理解することができます。実にマリア信心はキリスト信者をイエズスとその母との親子関係にあずからせ、こうして信者は二人と親しくつき合いながら、成長してゆくことができます。

教会の聖母信心は、マリアという人物の類いまれな価値と、救いのわざの中で果たしたその役割とに対する自然な評価からのみ発したわけではありません。それはキリストのご意志に基づくものなのです。

「ごらん、あなたの母だ」という言葉は、イエズスが弟子たちにマリアへの愛と信頼の心をもってほしいと

「罪と救し」……ルナ、セラヤ、デ・アロ共著 河野守夫・みどり、平井英子、新田壮一郎訳
現代人には罪の意識が薄く、ご聖体を拝領する人は多くても告解する人は少ないと言われる。本書では、救いの秘跡を受けるための心構えと具体的なヒントを盛り込んだ「よい告解をするには」、理論的な文献「罪とは」と「現代倫理観批判」を併録する。

本体価格九〇〇円

「召しだし」……ホセ・ルイス・ソリア著 新田壮一郎訳 本体価格三八〇円
 「召しだし」という言葉は呼びかけという意味を持つので、ただ人間的な次元から考えることはできない。神からの呼びかけに応えなければならぬ私たちは、どうすれば正しい判断を下すことができるのか。

考えたことを示しています。そして彼らがマリアを自分たちの母、全ての信者の母と考えるように導かれたのです。聖母の学校で、弟子たちはヨハネのように主を深く知ること、そして終わることのない親密な愛のきずなを主との間に結ぶことを学びます。さらに、御母の愛に身を委ね、従順で愛情深い子供のように生きる喜びを見出します。

キリスト教の信心の歴史は、マリアがキリストに達する道であり、子としてマリアを愛することはイエズスとの親しさを少しも邪魔することはなく、かえって親密さを深め、最高の完徳のレベルにまで導くことを示しています。世界中に無数にあるマリア聖堂は、主の御母、私たちの御母であるマリアの取り次ぎによる恩寵が引き起こした数々の不思議を証明しています。

聖母に目を向け、聖母の優しさに引かれた現代の人々は、同時に生命の主である救い主イエズスに出会うのです。誰にもまして、貧しい人や、精神面・感情面で、また物質的必要の面で試練に遭っている人々は神の御母に救いと平和を見出し、誰にとってもまことの豊かさは改心の恩寵とキリストに従うことにあると気づくでしょう。

マリアを毎日の生活の中へ迎え入れよう

3 福音書のギリシャ語原文は以下のように続きます。「その時からその弟子は、マリアを自分のものとして引き取った。」(ヨハネ19・27) こうしてヨハ

ネが進んでこそよくイエズスの言葉に従ったことが強調されています。彼は生涯、聖母の忠実で従順な息子となったに違いありません。

それは救いのみわざ完成の時でした。マリアの霊的な母性と、マリアと主の弟子たちをつなぐ新しいきずなはまさにこのような状況で始まったのです。

ヨハネは御母を「自分のものとして引き取り」ました。寛大なとも思えるこの行為は、彼が尊敬と愛に満たされて、自らマリアを自宅に引き取ったのみならず、霊的生活をも共にしたことを浮き彫りにしているようです。実際、ギリシャ語原文を文字通りに訳すと「自分のものとして引き取った」にはそれほど物質的なふくみはなく、聖アウグスチヌスによれば、むしろ「彼には何も自分のものがなかった」(In Ioan. Evang. tract. 119, 3)が、キリストからの霊的な善や賜物を授かった、ということになります。すなわち恩寵(ヨハネ1・16)、ことば(同12・48, 17・8)、霊(同7・39, 14・17)、天からのパン(同6・32~58)などです。この弟子はイエズスに愛されていたので、これらの賜物を与えられたわけですが、とりわけマリアを母として与えられ、聖母との深い交わりの生活に入ることになりました。(『救い主の母』45番、注の130番参照)

全てのキリスト者があの弟子の模範にならい、「マリアを自分のものとして引き取り」、救いの旅路における聖母の摂理的な役割を認め、自分の日々の生活の中に迎え入れることができますように。(1997・5・7)

主日はミサにあずかる日

兄弟姉妹の皆さん。

私は使徒書簡「主の日一日曜日の重要性」(カトリック中央協議会、1998年)を昨年の聖霊降臨の日に発表し、聖霊に捧げられた98年を強調するつもりでした。実に、教会が絶えず贖いの秘義の豊かさを思い出すのも、あらゆる時代の信者たちが豊かな贖いを再発見し、それを生かすことができるのも、聖霊の力によるものです。

日曜日の意味を再発見することは、今日のキリスト教共同体にとって最も急を要する問題です。実のところ多くの人にとって、日曜日は単なる「週末」に過ぎないのではないかと考えられますが、それは違います。日曜日はキリストのご復活を祝う日であり、毎週ごとの復活祭なのです。だからこそ「主の日」であり、domenicaと呼ばれます。イタリア語や他の言語で呼ばれるこの名こそ、ラテン語のdies dominicaあるいはdies Dominiにつながるものです。

十戒の第三戒に従って、日曜日を聖としなければなりません。それには何よりも、ミサ聖祭にあずかることです。かつて伝統的なキリスト教国では、文化として日曜日を守ることが容易でした。現代、日曜日の務めを忠実に守るた

めにはしばしば「時代に逆らわなければ」なりません。と言うわけで、信仰を新たに自覚し直すことが必要です。

皆さん、どうかキリストのために時間をさくことをいとわないで下さい。キリストに捧げた時間は、決して無駄にはなりません。それは私たち人間のために得られた時間、日々を光と希望で満たしてくれる時間なのです。

今回の使徒書簡で、私はまず司牧者たちに語りかけ、共に司牧的配慮の基礎となるこの問題を考えたいと思います。また、開かれた心で信者の皆さん一人ひとりと語り合いたいのです。(…)

兄弟姉妹の皆さん、私はこの書簡を皆さんに差し出します。間もなく夏の休暇が始まりますが、休みは「何もしない」時間ではありません。この書簡を携えてゆき、少し時間をさいて静かに読んでみてはいかがでしょうか。少なくともいくつかの点でおもしろい発見があるかもしれません。

祝された処女マリアの助けで、この書簡のメッセージがキリスト教共同体に受け入れられますように。信者たちを促して日曜日の過ごし方を振り返らせ、司牧者たちを励ましてこの問題にしかるべき重要性を持たせてくださいますように。現代ではいろいろ難しいことがあります。これも大聖年を祝うために貴重な貢献となることと思います。(1998・7・5、お告げの祈りの時間に。)

信仰を支える聖霊

兄弟姉妹の皆さん。復活祭から聖霊降臨の祝日に至るまでの間、喜びにあふれるアレレヤの歌声が信者の集いの中で何度も響きます。罪と死に対するキリストの勝利を褒め称えよ、との招きです。この時期は教会の始まりを訪ね、よみがえったイエズスに出会った弟子たちが聖霊の力を受けて世界中に福音を広める勇敢な宣教者となった次第を思い起こす良い機会です。

使徒行録を読み返し、初代教会の足取りをたどる時、ローマで開かれたアジア特別代表司教会議を思い出さずにはられません。地中海に面したアジアの沿岸はキリスト教の揺籃の地です。二千年を経て、教会は自らアジアでの存在を問い直し、人類の大半が住むその広大な大陸に目を注ぎ、再びキリストの言葉に耳を傾けるのです。「行け、諸国の民に教え、…私が命じたことをすべて守るように教えよ。私は世の終わりまで常におまえたちとともにいる。」(マテオ28・19~20)

また、復活された主の御母が、生まれたばかりの使徒の

共同体の中心におられたことが、使徒行録の記事からわかります。「婦人たちとイエズスの母マリアとともに、みな心を合わせて祈り続けていた。」(1・14)

十字架のもとでキリストの贖いのいけにえに深くあずかった時のように、高間にいた使徒たちの間で、マリアは沈黙の証人でした。ある意味で、マリアは使徒たちの信仰と祈りを生き返らせたのです。マリアの支えと励ましを受け、皆は声を一つにして、イエズスが約束された聖霊の到来を呼び求めました。このように聖霊降臨を待つ祈りの共同体というイメージは、常に私たちの目の前にあって、信仰と使徒職の旅路を支えてくれます。

兄弟姉妹の皆さん、熱意をもって、聖霊に祈り続けましょう。良き勤めを賜う御母、祝された処女も私たちを支え導いてくださるでしょう。アリアの取り次ぎによって、全ての信者の上に主の霊の賜物が下りますように。特に司教会議に参加した人々の上に。こうしてアジアの教会がすみやかな発展を遂げ、紀元二千年期が広大なアジアの高貴な国々の間で福音の新たな黄金期を画するものとなりますように。(1998・4・26、正午のレジナ・チェリの祈りの時間に。)

貧しい人々への愛はキリストを証しする

ベルギー・カトリック編集者とジャーナリスト協会の皆さんは、今年もペトロの後継者を訪ねてきてくださいました。(…)皆さんの聖座への好意と、ベルギーのカトリック出版界のジャーナリストと読者が携わるべき教会の使命への愛情を見て、たいへん嬉しく思います。お国が面している様々な困難にも関わらず、皆さんの同胞の方々は教会の慈善事業のための出資に同意してくださいました。このような発意はキリスト教共同体どうしの交わりのしるしであり、各地の地方教会からの贈り物を注意深く再配分するのは教皇に委ねられた仕事です。

旧約の預言者イザヤ(58・6~9)は、神に近づきたいと望む人、暁のような光になりたいと願う人は貧しい人に心をかけ、「飢える人にパンを分け」て神と兄弟たちへの愛を示さなければならない、と言っています。皆さんが献金を申し出てくださるのも、ペトロの後継者に会いたいと言ってくださいるのも、この同じ精神からでしょう。寛大に与える人々が、「神のために失ったものは、後で何度でも見出せる」(オリゲネス、創世記註解 7,6) ことに気づかれますように。

皆さんの行為は、私たちが人間として兄弟姉妹を支え

合っていること、近くても遠くても、苦しむ人に心を開くべきことを思い起こさせます。これは教会の変わらぬ大切な伝統の一部です。(回勅『新しい課題』57番参照) 貧しい人への愛は、人々の中におられるキリストを、手に触れるような形で証明するからです。私たちは地上の町の建設にも加わります。誰もが創造の豊かさの分け前にあずかることができなければなりません。全ての人々があらゆる分野で適切な形成と教育を受けて、より良い社会を作る権利があります。そうして各自の、また共通の未来のために責任を持ち、国家間の協調のうちにふさわしい場を得ることができましょう。全ての国民が自分と家族の将来に責任を持ち、国の資源を公正で理にかなった方法で運用して自立をはかることを可能にするための計画に協力しなければなりません。それは全ての人の義務です。

会見の最後に当たり、もう一度訴えたいと思います。大聖年には、キリスト信者と善意の人々がより一層するどい正義の感覚を持ち、個人や民族の間で富を分かち合うことができますように。

(…)皆さんの上に聖母の取り次ぎを願い、心から使徒の祝福を送ります。(…) (1998・10・23)

「教皇様の聲」 ヨハネ・パウロ二世教皇の説教、書簡、講話等を解説なしにそのまま伝える月刊紙

■毎月10日発行 ■定価：送料とも一部186円 ■年内定期購読：送料とも一部2,087円(税込)

詳しくは、精道教育促進協会までお問い合わせ下さい。

財団法人■精道教育促進協会 〒659-0093 兵庫県芦屋市船戸町12-6 TEL. 0797-31-3452・FAX. 0797-31-3448

振替口座：01130-8-72393 財団法人 精道教育促進協会